時代を切り拓く若い力

伝統建築の未来と

木造建築に携わる大工職人の数はこの30年間におよそ55万人減少し、2010年の国政調査では39万7000人にまで縮小している。プレカット材が主流の一般住宅の現場では、これまでの鉋（かんな）、鑿（のみ）、鋸（のこぎり）、差金（さしがね）などの伝統的な道具を使って工事を行う機会がめっきり減り、大工職人はこれまでの「棟梁」から「組立工」といわれるまでに立場が変化している現場もある。いま、伝統木造建築に必要な高度な技術を持つ棟梁が高齢化で現場を離れる中、若い後継者の育成が大きな課題となっている。今回は、若手大工を養成する大工育成塾（東京都港区・松田妙子塾長）の塾生6人の素顔をレポートした（敬称略）。大工職人を目指す一途な気持ちを謙虚で真摯な態度で語る塾生たちに心からエールを送りたい。

下小屋で鉋掛けに励む伊藤さん

手で作る家づくりを学びたい

伊藤直樹さん（23）
大工育成塾1年

昨年4月から、自宅のある神奈川県川崎市から大工育成塾の塾生として地元の受入工務店の望月工務店（横浜市）で修行を始めたのは伊藤直樹（23）。

望月工務店は創業以来プレカットは一切使わず、伝統的な手刻みで柱・梁による架構の美を生かした家づくりが特徴。

伊藤は昨年3月に、四年制大学の建築学科を卒業。大学時代の仲間のほとんどが現場監督に就くという環境にあって、あえて3年間の大工修行の道を選んだ。

中学時代は柔道部、高校では陸上部でハンマー投げをやっていて体力には自信がある。建築を目指す大きなきっかけはテレビの住宅リフォーム番組。「大工職人が黙々と木を刻む姿に感動し、匠の技を鑿・鉋など伝統の道具でつくってみたい」と考えた。

ものづくりに憧れ、大学は建築学科を選んだものの「木造建築をやろうというのに自分で道具も研げないのは嫌だ」と一からの修行の道をあえて選んだ。両親に「大工職人の修行を始めたい」という気持ちを打ち明けた時、「現場監督の方が収入が安定しているのでは」と反対された。

しかし伊藤は意志を貫き大工育成塾に入塾。入塾後、両親に受入工務店での仕事姿を見てもらった。この時、両親がかけてくれた「いい会社で良かったな」という言葉がいまでも強く心に残っているという。

週5日、親方と年上の先輩大工と3人チームで仕事をこなし、土曜日は下小屋で仕口・継手の刻みや道具研ぎ、日曜日は隔週で二級建築士の学校に通い始めた。

「木工事だけなく、様々な職種をまとめてひとつの家をチームで創りあげていくことの大切さや、モノや人の動きを身につけてほしい」という社長の考えもあり、水道、電気、タイル、足場まで他の職人とともに作業することが多い。

「毎日段取りをみているうちに自分でもある程度はでき流れを把握できるようになった。独立を目指すには大変いい経験になっている」と伊藤。

将来の夢は「作業場をもち、意匠から構造設計までこなせる工務店として独立」すること。「目標に向かって一歩一歩成長していきたい」と決意を語る。

ベイブリッジのような長大橋を木造で

松永充広さん（21）
大工育成塾3年

受入工務店の石川工務所（山梨県甲州市）の手によって建築当初の茅葺の姿に復元されている国重要文化財慈眼寺本堂（同笛吹市）の現場事務所に大工育成塾3年の松永充広と1年の石原千幹を訪ねた。同社は文化財建築物の修理や寺社建築、古民家再生では日本有数の歴史と実績を持つ工務店で、塾生にとっては古建築の修復作業に関わるという貴重な経験ができる環境にある。

◇　◇　◇

松永は、棟梁であり工務店経営者でもある父親の姿を見ながら育った。が、大工修行の道を決めたのは高校3年になってから。大学に進学してまでやりたい明確な目的が見つからなかったからだ。

松永家ではその2年前に自宅の建替えが行われていた。ここで松永は毎日、大工職人の働きぶりを見てきた。「実際に自分の手を掛けたものが形になっていくのは、楽しそうな仕事だな」とその時率直に感じた事を思い出し、最終的に父親が講師を務める大工育成塾に入塾することを決めた。

「今後も神社仏閣などでは簡単にプレカット材は使えない。しかも木材の癖や性質を見極め、墨付けをして刻む、という経験や技能をもった大工でなければできないことも少なくない。人にまねのできない仕事で創り上げる家も実現させたい」と松永。目標は棟梁であり経営者でもある「父親を超える」こと。そして「ベイブリッジのような大規模な橋を木造で架けてみたい」という。

常に強気の松永だが、将来のことになると「いずれ父の会社で働くことになる。大工としての技能を修得するだけでは駄目。自分の力で仕事を獲得していかなければならない」と不安を口にした。高い志をバネに立派な棟梁になってほしい。

国重要文化財慈眼寺本堂。石川工務所の茅葺職人の手によって建築当初の姿に復元されている

2年目の壁克服も修行の道

石原千幹さん（22）
大工育成塾1年

石原は、高校卒業後、応用化学を専門とする学科のある大学に進学した。しかし、「真剣に自分と向き合い、自分は何者で何ができるのかを考えたとき、体を張ってモノを創ることで生きがいを感じる自分を見つけた。それが大工だった」という。

動機付けになったのは、中学の卒業体験学習で見た工務店で働く職人さん達の「体を張って仕事をする姿」だったという。

1年生の石原にとって、大工道具の使い方や手入れ、さらに継ぎ手や仕口などの刻み加工など現場での技能習得がこれからの課題だ。石川工務所の細川浩行常務は「石原の場合は技能習得とは別に2年目の壁がこれからある」という。つまり「周りの友達が遊んでいてその誘惑を受けながら、厳しい修行生活に耐えられなくなる塾生が多いのが一年目を過ぎたあたり。松永の場合もそうした揺れる時があって、それを克服して今がある」という。

石原の造りたい家は和風住宅。「現代のようにモノがあふれている家をすっきりと収まる和風の家にしたい」という。そして「機会があれば五重の塔にチャレンジしたい」とも。

「今の修行はしんどいがやりがいがある。なせばなるを信条に一歩一歩前進したい」という石原。2年目の壁をクリアして一回り大きく成長した姿を見せてほしい。